

『竹取物語』の帝の〈死〉と御世

——「魂をとどめたる心地」を始発として——

春日美穂

一、はじめに

『竹取物語』において、五人の貴公子の求婚譚は失敗に終わる。次にかぐや姫に興味を持ったのは帝であった。帝は、内侍中臣ふさ子に、「多くの人の身をいたづらになしてあはざなるかぐや姫は、いかばかりの女ぞと、まかりて、見て参れ」(五六頁)^①と命じている。帝にとってかぐや姫は、御世を構成する五人もの人々を失わせた忌々しい存在であった。しかし、かぐや姫は「帝の召してのたまはむこと、かしこしとも思はず」(五七頁)と述べ、さらには、「国王の仰せごとをそむかば、はや、殺したまひてよかし」(五八頁)とまで述べている。それに対し帝は、「この女のたばかりにや負けむと思して」(五八頁)、すなわち、かぐや姫に負けたくないという気持ちからかぐや姫を宮仕えさせることを決意する。帝がかぐや姫の宮仕えを求めた背景として、まず、「たばかりにや負けむ」という思いが背景にある。その後、帝は翁に直接かぐや姫の献上を求める。「汝が持ちてはべるかぐや姫奉れ。顔かたちよしと聞しめして、御使賜びしかど、かひなく、見えずなりにけり。かくたいだしくやは慣らはすべき」(五八頁)と命じる口調は、自敬表現を多く用いて高圧的である。背景として翁の身分も大きく関係しているようが、『竹取物語』の帝は、多く自敬

表現を用いている。

しかし、その自敬表現が喪失するときに訪れる。かぐや姫を見るために御狩に訪れた帝はかぐや姫と対峙するもの、かぐや姫は影となるのであった。

帝、にはかに日を定めて御狩にいでたまうて、かぐや姫の家に入りたまうて、見たまふに、光満ちてけうらにてぬたる人あり。これならむと思して、逃げて入る袖をとらへたまへば、面をふたぎてさぶらへど、初めよく御覧じつれば、類なくめでたうおぼえさせたまひて、「ゆるさじとす」とて、率ておはしまさむとするに、かぐや姫答へて奏す。「おのが身は、この国に生れてはべらばこそ、使ひたまはめ、いと率ておはしましがたくやはべらむ」と奏す。帝、「なかさあらむ。なほ率ておはしまさむ」とて、御輿を寄せたまふに、このかぐや姫、きと影になりぬ。

(六一頁)

帝と対面してもなお、「逃げて入る」かぐや姫に対し、帝は「ゆるさじとす」「なほ率ておはしまさむ」とかぐや姫の思いを汲むことはない。もちろん、翁、そしてかぐや姫の身分を思えば、帝の態度は当然の振る舞いであるともいえる。しかし、この時点で女君の思いを汲む人物として描かれているとは言いがたい。帝の強行的な態度に、かぐや姫はついに「きと影に」なる。帝の様子が変わるのはいずれ以後である。

はかなく口惜しと思して、げにただ人にはあらざりけりと思して、「さらば、御供には率て行かじ。元の御かたちとなりたまひぬ。それを見てだに帰りなむ」と仰せらるれば、かぐや姫、元のかたちになりぬ。

(六一～六二頁)

帝の言葉からは、「御供」の部分以外、自敬表現が喪失している。しかも、「なりたまひぬ」とかぐや姫に対して敬語を用いて話すようになっているのである。帝の会話表現の変化により、物語は、かぐや姫に心を奪われる帝の様子を鮮やかに描き出す。そして、帝はかぐや姫に心を奪われつつも、宮中に帰るのであった。

帝、かぐや姫をとどめて帰りたまはむことを、あかず口惜しく思しけれど、魂をとどめたる心地してなむ、帰

らせたまひける。

(六一二頁)

かぐや姫への帝の強い思いは「魂をとどめたる心地」という形で表現される。そのち帝は、三年もの間「ただ独り住みしたまふ」(六三三頁)という当時の帝としてはありえない日々を送る。後継者を得る、臣下の人々と円滑な関係を築くなどの観点において、妃たちとの安定した関係が求められる帝という立場を考えたとき、『竹取物語』の帝の異様さと、それゆえのかぐや姫への思いの強さが伝わる描写となっている。

こうした帝の行動の背景には、かぐや姫の美しさ、そして、「きと影に」なる「ただ人」ではあり得ない特性が関係しているのはもちろん、そうしたかぐや姫に「魂をとどめたる心地」であつたという帝の強い思いが大きく関わっている。それでは、帝が「魂をとどめたる心地」になると描かれることの内実は、いかなるものであつたのだろうか。本論では、『竹取物語』の帝が、かぐや姫のもとに「魂をとどめたる」ことの意味について考えていきたい。

二、あくがれ、とどまる「魂」

『竹取物語』は、「物語の出で来はじめの親なる」(新編日本古典文学全集『源氏物語』「絵合」二―三八〇頁)作品であるため、前後関係が異なっているが、『竹取物語』の帝の魂を考えるために、平安期の『竹取物語』以後の作品に描かれる「魂」の例を確認する。それらの例から考えられることは、さかのぼって『竹取物語』にも考えられるのではないかと、という点からである。

まず、『伊勢物語』百十段「魂結び」の章段を確認する。

むかし、男、みそかに通ふ女ありけり。それがもとより、「今宵夢になむ見えたまひつる」といへりければ、男、思ひあまりいでにし魂のあるならむ夜、ふかく見えば魂結びせよ

(新編日本古典文学全集『伊勢物語』二〇八頁)

女の夢に自分が現れたことを聞いた男は、自らの魂が女を思うあまりに抜け出したものであるので、そのようなことが再びあれば、「魂結び」をしてくれるようにと歌を詠んでいる。新編全集頭注は、「魂結び」について、「魂結び」は、体から抜け出した魂を止めるまじない。思いあまると、魂が思う方へ出歩くと信じられていた」(二〇八頁)と注を付す。この遊離魂の発想は『源氏物語』などにも深く描かれていることは後述する。

『大和物語』には、生田川伝説を踏まえた人々の贈答が描かれる。その皮切りとなつた伊勢の歌に「魂なきから」と男の立場から女のこと詠まれ、続く女一の宮の二首には水に沈む女の魂と、女の魂を探す男の思いが詠み込まれている。

伊勢の御息所、男の心にて、

かげとのみ水のしたにてあひ見れど魂なきからはかひなかりけり

女になりたまひて、女一のみこ、

かぎりなくふかくしづめるわが魂は浮きたる人に見えむものは

また、宮、

いづこにか魂をもとめむわたつみのここかしこともおもほえなくに

(新編日本古典文学全集『大和物語』三七二頁)

以下、兵衛の命婦等の歌が続く。三人の死という悲劇的な結末を迎える生田川伝説を思う人々の歌に「魂」が詠み込まれていることは示唆的である。魂とは死して肉体から離れてもなお、愛する人とともにありたいと思うものであり、それほどの強い思いは、時として人を死に追いやるものでもあった。

『平中物語』においても、「魂」を詠む歌がみられる。

この男、うちつけながらも、立つこと惜しかりければ、かうぞ。

立ちてゆくゆくへも知らずかくのみぞ道の空にてまどふべらなる

女、返し、

かくのみしゆくへまどはばわが魂をたぐへやせまし道のしるべに

また、返しせむとするほどに、男女の供なる者ども、「夜明けぬべし」といひければ、立ちとどまらで、この男、浜辺の方に、人の家に入りにつけり。
(新編日本古典文学全集『平中物語』四九五～四九六頁)

逢坂の関で出会った男と女の贈答である。男が「ゆくへも知らず」と嘆いたことに對し、女が「わが魂をたぐへやせまし」と返している。新編全集頭注は、「心や魂を相手と共に添えてやろうというのは、思いの切なることを示すもの」(四九五頁)と注を付す。将来的に二人は京で再会し、結ばれている。男の無粋なさまにより、その仲は長くは続かなかったことが想定されるが、贈答の段階では、「逢坂の関」で出会うという運命的な出会い、かつ、互いの素性を知らず、もう会えないかもしれないという強い思いがこの贈答の背景にあつたことは確かである。

『蜻蛉日記』冒頭には、日記を著すに至る自身について、「心魂もあるにもあらで」という表現が見られる。ここでの「魂」は、分別の意として使われている。

かくありし時過ぎて、世の中にいとものはかなく、とにもかくにもつかで、世に経る人ありけり。かたちとても人にも似ず、心魂もあるにもあらで、かうものの要にもあらであるも、ことわりと思ひつつ、ただ臥し起き明かし暮らすまに、
(新編日本古典文学全集『蜻蛉日記』上巻八九頁)

『蜻蛉日記』はその最終部においても、「御魂など見るにも、例の尽きせぬことにおぼほれてぞはてにける」(下巻三六三頁)と魂が描かれている。ここでの魂は、「大晦日には死者の霊が訪れて来るといわれ、その霊のために祭をする。魂祭」(新編全集頭注 三六三頁)のことであり、作品冒頭の「魂」の内実とは異なるが、自身の魂の有り様を見つめる『蜻蛉日記』のはじめと終わりを象徴的に表している。

『うつほ物語』には非常に多くの魂が描かれている。氣立てや心を指す例が多いが、以下の例は『竹取物語』の帝

の例を考えるうえで示唆的である。

宰相、「なほ、この御返り、いささかなりとも聞こえて見せたまへ。さてのちはまたも聞こえじ。人の身にわが魂通はなむとは、思ふことを、人に知りたまはぬときになむ思ほえける」などのたまふ。

（新編日本古典文学全集『うつほ物語』「藤原の君」一一一四—一二三頁）
 あて宮を思う実忠が、思う人の身に「わが魂通はなむ」と思っている。思う人のもとに自らの魂が通うことが伝わって欲しいという表現からは、人を思う際には相手のもとに自分の魂がとどまるという発想がみられる。これは『竹取物語』の帝の魂の問題と通底しているといえよう。

こうした相手を思い、遊離する魂の問題を深く描いたのが『源氏物語』である。中でも六条御息所と柏木の例が示唆的である。

「いで、あらずや。身の上のいと苦しきを、しばしやすめたまへと聞こえむとてなむ。かく参り来むともさらに思はぬを、もの思ふ人の魂はげにあくがるものになむありける」となつかしげに言ひて、

なげきわび空に乱るるわが魂を結びとどめよしたがひのつま

（「葵」二一三九—四〇頁）

とのたまふ声、けはひ、その人にもあらず変りたまへり。

相手を思う魂は身をあくがれていく。それゆえに「結びとどめよ」とする六条御息所の言葉は、先に掲出した『伊勢物語』の発想と同じである。生霊となるほどに深く相手を思う魂は身を離れていくのである。そしてこの遊離する魂の問題は、『伊勢物語』、『大和物語』、『平中物語』、『うつほ物語』、『源氏物語』に変わらず描かれている。そこから翻って『竹取物語』について考えたとき、『竹取物語』にも遊離する魂の発想があると見ることが不可能だとはいえないだろう。すなわち、『竹取物語』の帝の魂も、「とどめたる心地」であるため完全に離れたわけではないものの、帝の身を離れかかっている、あるいは離れるほどにかくや姫に深くとらわれていることが改めて確認されるのである。しかも、あかされる魂が描かれるのは、死や生霊化といった極限状態にあるときである。このことは『源氏物語』柏木の例に特

に顕著である。

深き過ちもなきに、見あはせてまつりし夕のほどより、やがてかき乱り、まどひそめにし魂の、身にも還らずなりにしを、かの院の内にかくがれ歩かば、結びとどめたまへよ」など、いと弱げに、殻のやうなるさまして泣きみ笑ひみ語らひたまふ。

宮も、ものをのみ恥づかしうつつましと思したるさまを語る。さて、うちしめり、面瘦せたまへらむ御さまの、面影に見たてまつる心地して思ひやられたまへば、げにあくがるらむ魂や行き通ふらむなど、いとどしき心地も乱るれば、
(「柏木」四—二九五頁)

柏木の魂の問題はたびたび描かれている。掲出場面で柏木の魂は、女三の宮を思う気持ち、そして光源氏に密事が露見し、それを見とがめられたことの二点により身をあくがれている。その後柏木は死を迎えており、魂が身を離れるということは、死と直結するものであることが明らかである。

以上のことを考えたとき、『竹取物語』の帝がかぐや姫のもとに「魂をとどめたる心地」とされることの危機的状況が理解される。『伊勢物語』、『大和物語』、そして、『源氏物語』には、魂が身を離れることによる死の影が濃厚に描かれている。そのことを鑑みれば、『竹取物語』においても帝の純愛というレベルをこえ、帝が死の危機を抱え込む様子が描かれているということになる。『竹取物語』は、御世を治める帝の魂がひとりの女性にとどまってしまうとすることで、御世の重大な危機を描き出しているのである。

三、『竹取物語』の帝の〈死〉

以上のことをふまえたうえで、改めて『竹取物語』の物語世界に立ち返ってみたい。「魂をとどめたる心地」なが

ら宮中に歸る帝は、かぐや姫と歌を交わす。

御輿にたてまつりて後に、かぐや姫に、

歸るさのみゆき物憂くおもほえてそむきてとまるかぐや姫ゆゑ

御返りごと、

むぐらはふ下にも年は経ぬる身のなにかは玉のうてなをも見む

これを、帝御覽じて、いとど歸りたまはむ空もなく思さる。

(六一一～六三頁)

「そむきてとまる」、「歸りたまはむ空もなく思さる」と、かぐや姫のもとを離れがたい帝の心情が繰り返して描かれる。「魂をとどめたる心地」だけではなく、全体的に帝のかぐや姫に対する深い執着が現れている。魂を結果的にとどめてしまうような気持ちになったと同時に、せめて魂だけでもとどまりたいという帝の願いも込められているといえよう。それが、「かぐや姫のみ御心にかかりて、ただ独り住みましたまふ。よしなく御方々にも渡りたまはず」(六三頁)という状態と、その状態が「三年ばかり」(六三頁)も続いたという帝の状況に現れている。

この、三年もの間、「独り住み」⁸⁾であるという状態は、かぐや姫への愛を貫くという観点からは美しい物語であるが、実際の帝の御世を考えたとき、そして、魂と死の関係を考えたとき、前節でも述べたように、帝としての危機的な状況、さらには、帝の死までもが呼び込まれている。

このことを考える際に参考となるのは『古今和歌集』である。『古今和歌集』には「魂」の語が以下の五首にみられる。

からはぎ

読人知らず

四四八 空蟬の蛻は木ごとにとどむれど魂のゆくへを見ぬぞ悲しき

(新編日本古典文学全集『古今和歌集』巻第十物名 一八九頁)

五七一 恋しきにわびて魂まどひなばむなしき骸の名にや残らむ

(巻第十二恋歌二 一三七頁)

男の、人の国にまかれりける間に、女、には

かに病をしていと弱くなりける時、よみお

きて身まかりける

読人しらす

八五八 声をだに聞かで別るる魂よりもなき床に寝む君ぞかなしき

(巻第十六哀傷歌 三三五頁)

女ともだちと物語して別れてのちにつかはし

ける

みちのく

九九二 飽かざりし袖のなかにや入りにけむわが魂のなき心地する^⑨

(巻第十八雑歌下 三七四頁)

勝臣

一一〇二 かけりても何をか魂のきても見む骸は炎となりにしものを

(黒滅歌 四一八頁)

いずれもが身から離れた、あるいは離れそうになっている魂を詠むものである。五首のうち三首は「から(蛻、骸)」とともに用いられ、一首は「なき」君を嘆くものであり、魂と死の連関はここでも明らかである。唯一死の表現とセツトではない九九二番歌についても、相手を思う余りに相手の袖に私の魂が入ってしまったのだろうか、と詠まれており、残された体は魂のない「骸」同然のものであるという前提に立っている。「魂をとどめた」あと、三年もの間独

り住みを行う帝が描かれることから立ち現れる物語世界とは、帝が生ける骸同然であり、その間御世が大きな不安にさらされているということなのである。

小嶋菜温子氏は、「天皇のプラトニック・ラブとは、色好みの王者の本分を否定するものにほかならなかった。〈死〉もしくは、非・身体の関係でしか、帝と姫は向きあえない。(中略)〈王〉と〈女〉の究極のドラマに、『竹取物語』の〈知〉が凝縮されている」と述べられる。確かに、かぐや姫と帝との三年の関係は、愛欲や権力を超えた『竹取物語』が独自に開いた物語世界である。しかし、ほかの貴公子ではなく、帝その人とかぐや姫とをそのような状況に立たせ、帝の愛が御世に危機をもたらすというひとつの問題提起がなされているということが重要である。

ひとり住みする帝については、菅原秀氏が、「地上界の一人間が、恋愛という点において示しうる最上の、理想化された姿を突き詰めていく際、その人間像を当てはめうる存在として書かれ、登場している。最上の権力者としてというよりは、最上に描きうる人間像としてである」とし、大井田晴彦氏が「後宮の秩序を乱す、かかる振る舞いは帝王としては失格なのだが、かぐや姫との純愛に生きようとする帝の姿は、むしろそれゆえに、一人の男としての、独特の魅力を發揮しているのである」と述べられるように、帝の至高の人間性の描写であることとらえられることが多い。また、曾根誠一氏は、この期間について帝が「結果的に姫を、心的内面的に「所有」することになった」とし、「帝とかぐや姫ともに相手を思い遣ることのできる精神的成長を遂げる契機となったのである」とする。以上のような帝のひとり住みに帝の理想性を見る指摘はもちろん首肯されるのだが、一方で、帝が天の人たるかぐや姫により、擬似的な〈死〉の状態に追い込まれていることは重要である。それが擬似的なものであるとはいえ、一途な恋ゆえに男が死ぬ物語は、人々の心をひきつけるものではあるが、その〈死〉を迎える男が「帝」その人であるという点において、『竹取物語』は理想の恋の有り様を描くかにみえて、天によりこの世の治世が危機的な状況におかれたことを鋭く描き出しているのである。

四、〈死〉を取り戻す帝

独り住みの続く中、帝はかぐや姫が月に帰ろうとしていることを知り、使いを送って詳細を確認する。帝は、「一目見たまひし御心にだに忘れたまはぬに、明け暮れ見慣れたるかぐや姫をやりて、いかが思ふべき」（六八頁）と翁を思いやっております、かぐや姫への思いを育むなかで、人間的にも変化していることを感じさせる。御狩りに出かけ、自敬表現を多用する強権的な帝の面影はもはやない。

結局帝の送った人々はかぐや姫をとどめることはできず、かぐや姫は月に帰ることとなる。その際にかぐや姫が帝に送った文は、「心強くうけたまはらずなりにしこと、なめげなるものに思しめしとどめられぬるなむ、心にとまりはべりぬる」（七五頁）と、帝の心に自分の悪い印象が残ることを気にするという、かぐや姫の心情が伝わるものであった。さらに、そこに記された和歌、「今はとて天の羽衣着るをりぞ君をあはれと思ひいでける」（七五頁）には、かぐや姫から帝への「あはれ」が表出されており、かぐや姫もまた帝に思いを寄せていたことがはっきりと描かれる。高田祐彦氏は、『竹取物語』の帝と『源氏物語』の柏木について検討され、「帝においてはかろうじてありえた心の交流と永遠の別離の均衡は、柏木の場合無惨にもまったく失われている」とされる。確かに、かぐや姫と帝の関係からは、反転するものとして『源氏物語』の柏木の「かう、いとつらき御心にうつし心も失せはべりぬ。すこし思ひのどめよと思されば、あはれとだにのたまはせよ」と「おどしきこゆる」（「若菜下」四―二二八頁）言葉が想起される。柏木はせめて「あはれ」とだけでも言うてくれたらと願っており、「あはれ」が相手を思う心の慰撫として機能している。それゆえに『竹取物語』の帝は、「ひろげて御覧じて、いとあはれがらせたまひて、物もきこしめさず。御遊びなどもなかりけり」（七六頁）という状態となる。これらの行為も帝としては自身の正統性を損なうものであり、かぐや姫が『竹取物語』の帝の御世に与える傷がさらに深くなっていることは、叙情的な物語の筆致とは別の問題としておさえておかなくてはならない。

その後、帝は富士山にて「御文」「不死の薬の壺」（七七頁）を焼かせる¹⁹。この不死の薬を焼くことについては、高橋亨氏が「帝は「天人」に対峙すべき人間界の王として、かぐや姫の記憶とともに、公的な立場から不死の薬を拒絶したのだという読みが成り立つ。律令王権の天皇としての、「天人」との訣別である²⁰」とされたことにその意義は集約される²¹。しかし、「魂をとどめた」ことにより、死の危機にさらされていた帝が、「不死の薬」を前に、それを燃やして死を受容することは、すなわち、いずれ訪れる死までは「生きる」ことを表しているといえるのではないか。帝個人の問題として、「不死の薬」の拒否が「死の受容」としてあることが重要である²²。それをふまえれば、かぐや姫にかかわるものを焼くことも、「魂をとどめた」相手にかかわるものを焼くことで魂を取り戻す行為にほかならない。『竹取物語』の帝は、不死の薬を焼き、死を受容することで、自らの魂を取り戻したのである。もちろんその後帝が生きていく世界は、魂をとどめるほどに愛する人を失ったものではある。しかし、そこで帝は「帝」として生きていかなければならず、また生きていくのである。そのことは、『竹取物語』最終末部の富士山の語源説話が、不死の薬を焼いたことではなく、帝の勅使つきのいはがさとその土たちの行為としてとらえられていることに示唆的である²³。帝はかぐや姫を失ったが、帝としての自らを取り戻したといえるのである。『竹取物語』は月からの人かぐや姫によってもたらされた御世の混乱を、帝が帝としての自らを取り戻すという形で終結させたのである。

五、おわりに

『竹取物語』の帝が、かぐや姫にひかれ、それにより「魂をとどめ」たと描かれることについて確認してきた。魂をとどめるといふ表現は、相手に深く執着していることを示すものであることを、他作品における魂の描写について検討することをおして確認した。また、そのように思う相手のもとに魂をとどめてしまうということは、死と隣り

合わせの執着であることも確認した。

『竹取物語』の帝の物語は、しばしば、かぐや姫を思う至高の愛の描写、それゆえにそれができる至高の人としての帝の問題としてとらえられ、それが御世の危機的状況につながるという面は強調されてこなかった。しかし、帝が魂をかぐや姫のもとにとどめ、生ける骸となった状況は、まさしく御世の危機的な状況である。ひとりの相手を愛し、御世を狂わせていく中古の物語の帝としては、やはり『源氏物語』の桐壺帝がまずあげられよう。そして、それを先行して、ひとりの相手を愛し、御世を狂わせる帝として『竹取物語』の帝がある。

しかし、『竹取物語』は、帝を御世を狂わせたままの帝では終わらせなかった。天人が与えた不死の薬を拒絶することで、生ける骸を脱し、いずれ来る死を受容する帝を描く。また、愛するかぐや姫が残したものについても処分を行い、人間ならざる者を愛したことの決着を自分自身でつける帝を描いていくのである。そしてその行為は、「勅使」が「土どもあまた」を引きつれて行くと描かれることで、多くの人々に月の世界を拒絶し、かぐや姫を拒絶したことを見せる行為として機能している。これにより、帝は、帝として再び『竹取物語』の御世の中で機能していくことが予想されるのである。

帝は、かぐや姫が去った後の地上世界で、五人の有力な貴公子を失い、また三年もの間機能不全に陥った御世の再構築を行わなくてはならない。しかし翁を気遣うことのできる人として変貌した帝である。また、それまでとは違った新たな御世を作り出していくことが予測される。『竹取物語』が帝と、帝の指示した行為によって終息していくことは、この世の秩序を重んじる『竹取物語』の世界観があらわれたものとしても機能しているのである。

註

- (1)本文の引用は、小学館刊新編日本古典文学全集により、頁数を付す。傍線等は適宜補っている。
- (2)曾根誠一氏は、このかぐや姫の言葉から、「支配（所有）者と被支配（被所有）者という帝と地上の人々とのあ

りようとは異なる、対等・平等のありようを前提としていた」とかぐや姫と帝の関係を指摘されている（「帝と翁の位相―かぐや姫を「見る」ことへのこだわりを視点として―」『研究講座竹取物語の視界』新典社一九九八年 二九八頁）。

(3)小嶋菜温子氏は、かぐや姫と帝の階層差こそが二人の関係の緊迫感を生み出していることを指摘される（「かぐや姫の〈罪〉と帝―『今昔物語集』竹取説話の世界観から」『源氏物語の性と生誕―王朝文化史論』有斐閣二〇〇四年）。

(4)この場面における帝については、前掲註(2)において曾根氏が「地上世界の支配者としての帝独自の意味合いは、既にかぐや姫に対しては、有効性を持ち得なくなっているのである」（三〇二頁）と指摘されるとおりであろう。また、長沼英二氏は、『竹取物語』の地の文の敬語表現に着目され、「天皇は、つねに敬意対象とする」という規則があつたうえで、「かぐや姫について、関係者との間に共感が成立する場合には、かぐや姫を敬意対象とする」という規則があると指摘されている（「竹取物語の地の表現の敬語」『研究講座竹取物語の視界』三二四頁）。

(5)「魂をとどめたる心地してなむ、帰らせたまひける」の部分は、諸本に大きな異同はない（『竹取物語本文集成』勉誠出版 二〇〇八年）。

(6)二人の例のほかにも、母を恋う浮舟についても「もの思ふ人の魂はあくがるなるもの」（「浮舟」六一―一九六頁）と描かれており、後述する『古今和歌集』九九二番歌も含め、男女の仲に限らず、相手を深く思うと魂があくがれていくという発想がみられる。

(7)江口郁海氏は、『源氏物語』の玉鬘求婚譚にかかわる蛭兵部卿宮の「独り住み」の表現に着目され、蛭兵部卿宮が『竹取物語』の帝と重ね合わされているとし、蛭兵部卿宮と『竹取物語』の帝には、ともに光によって写し出されることと思う人の姿を見るという共通項があると述べられる（「玉鬘求婚譚における『竹取物語』引用―求婚者・蛭兵部卿宮と「翁」としての光源氏―」『学芸国語国文学』五〇巻 二〇一八年。なお、『源氏物語』の冷

泉帝と『竹取物語』の帝と照らし合わせて検討したものと、本橋裕美氏「冷泉朝の終焉―玉鬘物語をめぐる―」『斎宮の文学史』翰林書房 二〇一六年がある。『竹取物語』で帝がかぐや姫を見た光は蛸の光ではないが、「光満ち」たなかにいたかぐや姫の様子やかぐや姫との出会いが帝の魂に影響を及ぼしたことは間違いない。また、竹内正彦氏は、『伊勢物語』三九段について検討され、「蛸に魂を見るところという感覚は、男の歌を理解するうえで欠くことのできない要素となる」（一九一頁）としたうえで、『伊勢物語』における「蛸」は、「そのいずれもが人の死にかかわる」（一九二頁）と述べられる（「蛸火で女を見る話―『伊勢物語』三九段をめぐる―」『伊勢物語の表現史』笠間書院 二〇〇四年）。魂と死の問題として示唆的である。

(8) 『竹取物語』の帝とかぐや姫がプラトニックな関係であったことが、その後の物語に「変奏」されていくことの意義については、秋山虔氏、後藤祥子氏、三田村雅子氏、河添房江氏による「共同討議 玉鬘十帖を読む」（国文学解釈と教材の研究）第三三巻第一三号 一九八七年一月）で言及されている。

(9) 高田祐彦氏は、『源氏物語』柏木の遊離する魂について、当該歌や前述した『伊勢物語』の和歌、その他の和歌をもとに検討され、「恋の思いの極限としての離魂が、習俗の問題にとどまらず、歌の表現としてある程度馴致しつつあったと考えられるのである」とする（「身のはての想像力―柏木の魂と死―」『源氏物語の文学史』東京大学出版会 二〇〇三年 三四六頁）。

(10) 前掲註(3) 八八頁。

(11) 室田知香氏は、『源氏物語』の『竹取物語』受容について、『竹取物語』のかぐや姫の昇天が人の死より正確には人の死とそしてそののちの火葬による現世からの消滅―と通うものとして凝視され、真つ向から重ねられているのは、『源氏物語』の第二部、殊に御法巻においてであり、『源氏物語』が柏木巻以来、『竹取物語』のもつ世界観を再解釈し吸収していこうとする一連の流れの中にあるもの、と見ることができると指摘される（『源氏物語』第二部後半の『竹取物語』受容」『中古文学』第八五巻 二〇一〇年）。

- (12) 菅原秀氏 『竹取物語』の帝像」(弘前学院大学文学部紀要」第四四号 二〇〇八年)。
- (13) 倉又幸良氏も、「帝・かぐや姫の威厳と美に満ちた内面性を実現するために、『内伝』が漢書の変形をも加えながら物語の枠組となっていく」という形で帝の内面について言及している(倉又幸良氏『竹取物語』の帝物語―『漢武帝内伝』からの離陸―『研究講座竹取物語の視界』)。
- (14) 大井田晴彦氏 「八 狩の行幸 帝の求婚 【鑑賞】」(『竹取物語 現代語訳対照・索引付』笠間書院 二〇一二年 七七頁)。同節のなかで大井田氏も、帝がかぐや姫に敬語を使用することに着目されている。
- (15) 前掲註(2)三〇三頁、三二二頁。
- (16) 久保堅一氏は、翁とかぐや姫について、仏教的には絶たねばならない「恩愛」を『竹取物語』は否定していないことから、『竹取物語』の主題が仏教思想に抗うものとして生成されていることを指摘される(『竹取物語』と仏伝「中古文学」第七七卷 二〇〇六年)。一方で塚原明弘氏は、『竹取物語』が受ける浄土教の影響について指摘されており(「天の迎えと極楽の迎え―『竹取物語』成立の背景としての浄土教―」『日本文学』第五八巻第六号 二〇〇九年六月)、『竹取物語』が描こうとするものが同時代の背景なども取り込み、非常に複雑であることが理解される。
- (17) 高田祐彦氏前掲註(9)三五五頁。なお、高田氏は柏木の遊離する魂が「絶えざるもの思いを形象化」しているときれ、あわせて、「竹取の帝もまたかぐや姫に魂が遊離するほどの執着を感じていた」(三五五頁)と、『竹取物語』の帝がかぐや姫のもとに魂をとどめたことについても言及されている。
- (18) このことは、古川美知代氏「拒食する桐壺帝―「桐壺」巻を中心に―」(『物語文学論究』第二二号 二〇〇七年三月)、春日美穂「朱雀院の「遊び」―「滯標」巻の記述を始発として―」(『源氏物語の帝―人物と表現の連関―』おうふう 二〇〇九年)に詳しい。
- (19) 『竹取物語』の帝が文を焼くことの意味に着目された論として、陣野英則氏「自らの言葉を処分する仮名文書―

平安時代の和文―(『源氏物語論―女房・書かれた言葉・引用―』勉強出版 二〇一六年)がある。仲田美咲氏は、『竹取物語』の帝が文を焼かせることの国家祭祀としての意義について言及されている(『竹取物語』御文と不死の薬を焼かせる帝―「頂」と「峰」を起点として― 国学院大学国文学会二〇二〇年一月例会口頭発表)。

(20) 高橋亨氏『竹取物語』の〈終わり〉と物語史のはじまり」(『国文学解釈と鑑賞』第七五巻三号 二〇一〇年三月)。
(21) 『竹取物語』の帝の〈死〉について詳細な検討をされたのが小嶋菜温子氏である。氏は嵯峨・淳和・仁明朝における帝の〈魂〉や〈死〉について検討され、タタリのエネルギーの問題としてとらえられている(『王の死と身体 ケガレの制度史』『かぐや姫幻想―皇権と禁忌(新装版)』森話社 二〇〇二年)。

(22) 関根賢司氏は帝が自分で不死の薬を焼くことについて、死の起源説話と関連させ、人間の、死への肯定が、「文学や思想の発生するトポス」であるとされる(『死の起源 〈帝〉の系譜学』『竹取物語論 神話／系譜学』おうふう 二〇〇五年 一九二頁)。また、梅山秀幸氏は、『竹取物語』の帝の死と文武天皇の死を連関させて検討している(『物語の中のみかど』『かぐや姫の光と影 物語の初めに隠されたこと』人文書院 一九九一年)。

(23) 小嶋菜温子氏も、前掲注三において、『竹取物語』終末部が律令皇権のシステムの枠組みにあることを指摘される。